

共同利用・共同研究課題「『失敗』のフィールド言語学」(jrp000285) 2023 年度第 2 回研究会 (通算第 2 回目)

日時：2024 年 3 月 5 日 (火) 11:00-18:00

場所：アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA 研) 304 マルチメディア会議室+オンライン

本共同研究課題の 2 回目となる今研究会では、4 件の報告を通じ、言語学のフィールドワークにおける過去の失敗事例についての情報共有をおこない、それにもとづき討論した。当日報告は以下のものである。

澤田英夫 (AA 研所員) 「掻き捨てられない旅の恥」

加藤昌彦 (AA 研共同研究員, 慶應義塾大学) 「カレン語研究における私の失敗」

稲垣和也 (AA 研共同研究員, 南山大学) 「後悔しないために：インドネシアでの言語フィールドワーク」

渡辺己 (AA 研所員) 「聞きたいものだけが聞こえる：スライアモン語の調査より」

研究会は AA 研 304 マルチメディア会議室での対面およびオンラインのハイブリッド形式で開催した。前回同様、はじめに代表者の山越が趣旨説明をおこなったのち個別事例の報告をおこなった。報告のなかにはプライベートな問題に立ち入った内容のものもあったため、本報告書においても差し支えの無い範囲で概要を述べる。

第一報告者の澤田は、ミャンマー、カチン州におけるロンウォー語をはじめとするチベット・ビルマ系言語のフィールドワークの経歴を紹介したうえで、それら一連の調査を通じての失敗事例について報告した。具体的な事例としては、調査初期に用いた正書法による教本を使ったことで無意識に正書法のバイアスがかかり、より妥当な音韻解釈が当初はできていなかったこと、翻訳による調査をおこなったことでやや不自然なデータとなってしまうこと、基礎語彙収集において同一の話者から網羅的に基礎語彙の録音データを採録できていないこと、調査機器の片付けを話者に手伝ってもらったことが仇となり、ケーブルの断線が起これその後不明瞭な音声で録音されてしまったこと、土産として持っていった飴を話者が舐めたまま発話していたこと、などであった。翻訳による例文調査のケースは初回研究会の発表においても同様の経験が報告されており、これらのデータを慎重に扱う必要がある。基礎語彙収集に関しては、その目的に応じて柔軟に調査票を利用することが望ましいといった意見も出た。

第二報告者の加藤は、第一発表者の澤田と同じくミャンマーを主たるフィールドの一つとしている。調査対象言語であるカレン語を調査するようになったきっかけから始まり、現地の状況・文化的背景などが調査に影響を及ぼすケース等について紹介した。現地での行動

が噂となって悪い影響を及ぼす恐れがあること、調査協力者が異性の場合にはとくにさまざまな配慮（時間帯・調査場所）の必要があることなどである。このほか、録音機器のオン・オフ操作を誤り、録音すべき発話が録音されておらず、逆に録音する意図のなかった発話だけが録音されていたので、オンのままにしておくべきだったという提案もあった。これは調査当時録音メディアの容量に制限があったことが原因の一つと考えられる。現在のようデジタル音源の場合にはそれを回避できる可能性が高いが、その一方で膨大な録音データからいかに適切に使いたいデータを探すのかという問題が生じているという指摘があった。

つづいて稲垣は、インドネシアおよびパプア・ニューギニアでの言語調査の経歴を振り返り、それぞれの時期でどのような経験をしてきたか、それを受けて現在どういったことに注意を払っているのかについて報告した。「失敗」（と呼ぶかどうかは措くが）の経験については、たとえば言語調査以外の面では交通・健康・生活環境などの外的要因、調査協力者の資質や信頼関係構築といった避けられうるものもある。その一方で、失敗とはみなされないものもあるというコメントがあった。たとえばより社会的貢献度の高い成果を得るために調査対象言語を選定すべきかという点に関しては、研究に対するモチベーションが維持できないのではないかという意見も出た。

渡辺は北米太平洋岸でのスライアモン語調査の経歴を紹介したうえで、すべての先行記述でこれまで「弁別性が無い」とされていたストレス（と思われる超分節的要素）が、弁別性を有するという事実をつかんだことについて報告した。調査者自身が話者の発話をきちんと再現できているにも関わらず、複雑な音声（子音・母音）の聞き取りに集中してしまったために、その事実気づけなかったという反省であったが、多くの参加者はこれをむしろ「成功」と指摘した。しかし、調査の初期からストレスにも注意を向けていれば、早い段階で十分に気付けたはずであったことが、報告者の反省・後悔となった。これについては参加者からも類似の経験をしたことがあるというコメントが寄せられ、言語調査は徐々に視界が開けていくようなもので、先行記述で「もや」がかかっていた部分を、継続して調査したことでその「もや」を晴らしたと肯定的にとらえるべきだという意見が出た。

以上4名の報告ののち、次回以降の研究会について相談した。

（文責：山越康裕）

※当報告の内容は、報告者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.